

賛じぬる。

うなる等が清き笑まひにほだされて哀れ五尺の髪

亂れたり。

世の光り入のひかりよ神もまたくだりて舞はむ春

の團樂や。

野うばらも麻にまじらばたは直し小さき乍らの花

や匂はむ。

黙禱のあさ戸に榮ゆるやはらぎや光りさながら神

胸に入る。

彩衣もわれ何かせむあたゝかき愛の眞玉のうた得

なば足る。

若松にみどりあせざるひかり見ぬ千歳榮あれ天を

しのぎて。

歌筆は神がゆるせし技藝なり永久につよかれ愛の

いのち毛。

地球もまた碎けざらめやこの骸なかばは闇になか
ば光りに。

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟 一人十句以下

一、締切 七月二十五日限り

一、披露 明治三十八年九月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にても投吟する事を
得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)

住所氏名雅號を明記し必ず左の名宛
にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會 俳句掛

鹽野 奇零 宛

第十二回俳句端書集

卯の花や馴れて夜道を無提灯 東京 久米 辰子

見て居れば蕘のしめる新樹哉 同

郭公高尾の嘘は十七字 同

森を出て聲に巾あり時鳥 仙台 立花せん子

うつすりと夜は明に梟白牡丹 同

藤咲て水も殖えけり庭の池 同

木に草に立つ風清し五月晴 陸奥 須藤美佐子

兩岸や緑滴る夏の川 同

三文で四五本買ひぬ花菖蒲 同

四里四方寂しき山や閑古鳥 同

春惜しむ雨に戻りぬ旅の人 長野市 飯塚 曉霞

海棠や露美しき化粧窓 同

豪農の藪屋いかめし白牡丹 同

川一と重國の詛りや田植唄 神奈川 平岩 學洋

木像の鼻の穴から羽蟻かな 同

蚊に喰れ〜いさこふ夫婦哉 同

鶯や初音の様に老を聞く 同

神橋の下闇凄し蚊喰鳥 川越 神田 諦迷

草村の破れ社や蚊喰鳥 同

水神の岩の向ひや咲くつゝじ 同

門番の毛虫焼き居る若葉哉 同

庄屋殿の五月幟や若葉越し 同

公園や若葉の蔭のハンモック 川越 内藤 夢蝶

帆柱を四五寸かけて螢かな 同

西日さす離れ座敷や美人草 佐他保 佐藤 柳月

青桐の老鶯や朝の雨 在満州 吉野 孤聲

草村の早き夕餉や蚊喰鳥 豊前 金子 琴月

芥子散や雨しと〜と日の暮る常陸 落 花 庵

卯の花や庚申堂の片庇 栃木 櫻井 閑山

螢とぶ水田の闇や鳥羽の道 同

武に立てし神代尊し菖蒲酒 大坂 杉本さよ女

神垣の崩れたまゝや咲つゝじ 駿河 小田 樂水

姥車松の並木の風涼し 秩父 青葉伊佐吉

呼鈴や立ち来る下女の單衣 同

蚊遣火や老たる人の目の細さ 同

荀に竿立てゝ去る小供かな 同

卯の花や若き女の小襦取る 同

夏草や馬引きとめて物案じ 同

三 光

天、川狩や喧嘩に暮て獲物なき 秩父 青葉尹人

地、行水に裸体のまゝや打つ螢 川越 神田諦迷

人、暮かけて調子の早し田植唄 神奈川 平岩學洋

一日一詠 無一庵鹽野奇零

五月十日 區々の風曇り

曇りつゞく春の名残や麥の色

五月十一日 雞の雛七匹生まる

門口の櫻若葉や雞のひな

五月十二日 釋迦誕生日にあたる

麥笛に人集まるや花御堂

五月十三日 俘虜兵の圖に題す

永き日や波艦に伸ばす俘虜の首

五月十四日 鐵道大隊入間川に水雷を試験す

水雷や柳にくらき水烟り

五月十五日 釣して釣れず暮方家にもどる

糞桶を洗ふ小川や初螢

五月十六日 つばめ家に入る

初つばめかるき病ひの快よき

五月十七日 庭の牡丹盛り過ぎたり

夕暮るる雨に崩れつ白牡丹

五月十八日 郊外散策

夕雲雀五彩の雲の美しさ

五月十九日 今曉初雷を聞く

時ならぬ初雷に目をさましけり

五月二十日 偶吟

初夏や田舎を廻る大神樂

五月二十一日 尼寺に經讀む聲を聞きて

蝙蝠や經讀む聲の暮淋し

五月二十二日 途上吟

川狩の腕白太郎次郎かな

五月二十三日 村長殿の構いと廣し

青葉若葉村長殿の構ひかな

五月二十四日 紺屋の娘美しとの評判

更衣紺屋の娘色白く

五月二十五日 暮方渡船場を過ぐ

渡船場に米とぐ音や蚊喰鳥

五月二十六日 隣の子毛虫にさゝる

まゝ事の泣て果てたる毛虫かな

五月二十七日 茶店に憩ふ

更衣田舎娘の素良かな

五月二十八日 日本海々戦の大捷を祝す

敵の艦沈めて高し臯月晴

五月二十九日 途上の吟

名に残る關所のあとや閑古鳥

五月三十日 偶吟

沈吟の朽によれば風かほる

五月三十一日 途上の吟

茨白き野川の土手やとぶ螢

六月一日 夏霞

新緑の愛宕は遠し夏霞

六月二日 蚤に眠れどりき

翌日晴れる天氣を知るや蚤多き

六月三日 薔薇

薔薇かざす後ろ姿や廂髪

六月四日 節句

朝晴の山色青し鯉幟

六月五日 螢庭にとぶ

庭風呂に三日の月やとぶ螢

暑さの折柄の晝の休の眠氣さましの友にもと、

可笑しき狂言の一節左に、

狂言 (附子)

主人「此あたりの大名で御座る。今日はさる方へ来る太郎をよび出し申し付くる事がある。太郎冠者あるか。太郎冠者「ハア」主人「居たか」太郎「お前に」

主人「ねんなう早かつた、次郎冠者もよべ」太郎「畏

つて御座る、次郎冠者召すは」次郎「心得た、御前

に」主人「汝等をよび出すは別の事でない。今日は

さる方へ行く、兩人共に留主をせい、冠者二人「畏

つて御座る」主人「夫に待て」主人「やい、此あなた

に附子がある程に、さう心得い」二人「夫ならば兩

人共に御供を致しませう」主人「さうではない、此

あなたに附子と言ふて毒が有る、此方から吹く風

が當つてさへ滅却する程に、さう心得い」二人「畏

つて御座る」太郎「やい、次郎冠者、今日の様な

留守はわるまいぞ」次郎「かう、そなたか供に行

けば身供が留主をする、身供が供に行けばそなた

が留守をする、今日の様に言ひ合はせた留主は有

るまいぞ、そりやわ」太郎「何事じや」次郎「附子の

方から風が來た、此處にて放せ」太郎「身供はわの